師、一山の衆侶を引見して須弥壇に礼拝愈々、鈴木商店在職物故者の慰霊大法要を執行せられる。豪拓荘重極りない大般若経六百軸の転読奉誦、四百六十五の先亡諸精霊位を呼ぶ導師の声は満堂を圧し粛としてしわぶきもない。やがて高畑会長は除に歩を運んで献花の礼を捧げられる。印象的な時が胸に沁み入るように流れた。結修を告げる太鼓の音、こうして法要は滞りなく終った」。

鈴木商店解散四十周年を契機として供養塔建立の動きが加速し、献金は企業団体、個人を合わせて五百六十名に達している。

昭和四十三年四月二日、会員皆の念願であった供養塔が建立され、除幕式が執り行われる。会長高畑誠一氏は体調優れず参列できなかったが、祝辞を寄せ「本日陽春のよき日を選びまして、鈴木関係故人の慰霊塔を残存者一同の浄財を集めて建設し本日その除幕式を開催されました事は御同慶の至りです。不思議にも四月二日は戦後の記念すべき世界状勢、政治経済の大変動の起因記念日にもなる事は御承知の通りです。この日を卜として除幕式を行うのも何かの縁です。残存者も漸減する一方ですが地下にある物故者も、残存者の好意を汲み取られ喜ばれる事と思います。皆様方の御親切に対して感謝されている事と思います。―以下省略―」と述べられた。

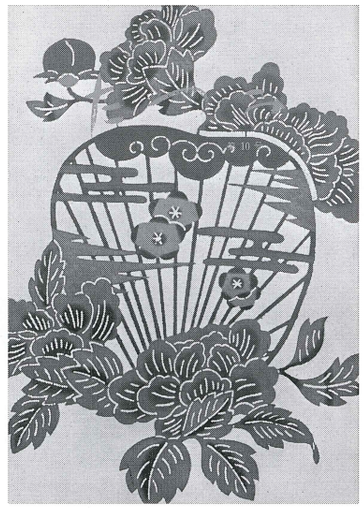
供養塔の傍らには板石が設けられ、その碑文は

「辰」鈴木商店解散四十周年に際し其の偉業を偲び物故先覚同僚追慕の念更にあらたなり　ここに供養塔を建立し霊とこしえに安かれと祈念するものなり

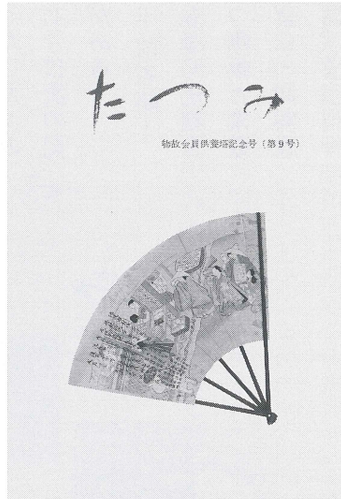
昭和四十三年四月　建立　辰巳会」

と彫られている。

供養塔除幕式に参列した日商㈱社長・西川政一氏は挨拶の中で辰巳会の将来を「二世三世をこの辰巳会の会員として、そういう方がどんどんと来て会を賑やかにしてやるという事でなければ、あっちむく人ばかりじゃ困りますので一つこっちむく人を大いに会員にしたい」と言及された。この時、辰巳会創立八年であった。



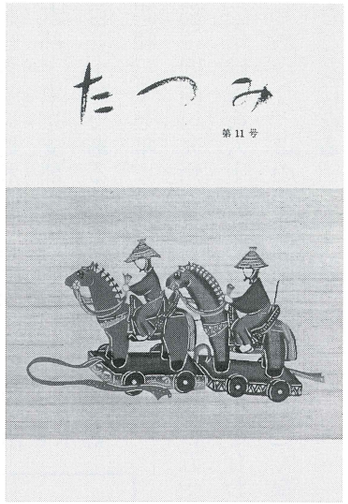
（第10号）



天王寺扇面古写経（国宝）　（第9号）

また、昭和四十三年十一月三日に北海道支部が設立した。同支部は鈴木商店の小樽支店及び函館支店に在職した方で結成した。これで辰巳会の組織は、本部の外、東京・中部・四国・九州に北海道が加わり五支部になり、名実ともに鈴木商店関係者による全国規模の会員組織になる。

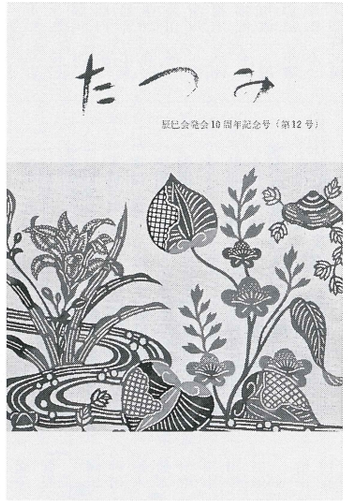
昭和四十四年四月四日、神戸祥龍寺で全国大会と共に、鈴木商店支配人西川文蔵氏の五十回忌の法要が百五十五名の参列のもと執り行われる。



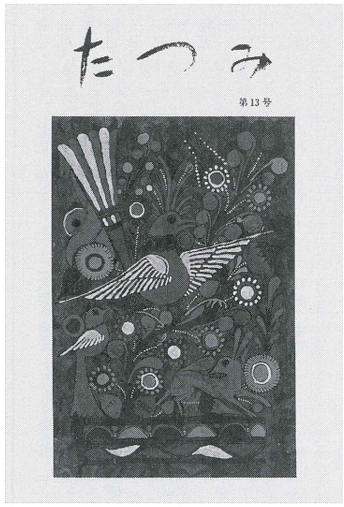
（第11号）

（三）　辰巳会創立十周年

昭和四十五年五月七日、創立十周年を記念する全国大会が開催される。会場となった奈良依水園には、風雨激しい天候にかかわらず二百名余りの会員が集う。大会記には、「―快晴なれば言はずもがな新緑に一きわ冴え渡る奈良市水門町の名園、依水園に於いてである。――ともあれ辰巳会も茲に創立十周年を迎える事となり、恰もお家様の三十三回忌、岩次郎様（二代目）の二十七回忌の法要を務めさせて頂く事であれば―」と記されている。そして神戸祥龍寺の菅宗信禅師による読経で始まり、先に亡くなった諸霊位の読み上げが続き、遺族・鈴木治雄、辰巳会代表・高畑誠一、旧鈴木商店従業員代表・西川政一の三氏が献花の礼をされ、引続き米寿を祝う銀盃贈呈、受勲の栄誉



（第12号）



（第13号）

に輝いた会員に祝辞と花束が贈呈された。大会の後半の野外園遊会はそれまでの風雨も上り、春日山を背景に歓談の輪が拡がった。

辰巳会は、鈴木商店、そして関連企業に在職した方によっての創立から十年が過ぎた。当時の第一線で活躍した社員も高齢になり、辰巳会創立の発起人であった浅田長平氏、橋本隆正氏、沢村亮一氏が昭和四十五年に亡くなられた。

この十年間、正会員の推移は創立時昭和三十五年は本部・東京支部の組織で四百五十名である。二年後の昭和三十七年、この間に中部・四国・九州の各支部の誕生で六百五十名になる。昭和四十二年は六百六十四名になり、準会員を合わせる千名に余る会員であった。この後、高齢の正会員が亡くなり、会員の減少が進むことになる。

昭和四十六年から辰巳会の例会は、全国大会が新緑の五月、一月の新年例会、そして十月の秋季例会、一年に三回行われることになる。一方、支部は東京支部が本部同様の定例の会合を開催、他の支部は不定期ではあるが開催されている。

鈴木よね刀自33回忌法要
鈴木岩治郎氏27回忌法要
並に全国大会出席者名簿

昭和45年5月7日
於奈良　依水園

北海道支部

〔加地彰太郎
同伴一名〕
牧野　豊二
西野　義人
戸谷太道三
碓井　キン

東京支部

安東　幸
藤芳　新吾
原田　広治
移川　中
河合　一雄
〔川野喜久恵
同伴一名〕
唐戸　登美
菊地　輝男
益子　史朗
宮尾　亮三
西村　君子
西村　正一
〔西川　政一
同伴一名〕
太田　武城
〔斎藤　虎吉
同伴一名〕
嶋内　義治
〔鈴木　丸衛
同伴一名〕
瀬戸口　又
田子　健
田代　義雄
山地　保
山下　元徳

〔山成　卓爾
同伴一名〕
依田　花子

中部支部

秋元　鷹男
土肥尚太郎
藤原　長司
伏見　俊助
〔長谷川　滋
同伴一名〕
井上　一郎
伊藤　庄次
北村　秋一
村井　順三
森田　英一
竹下冨士松
〔竹村豊太郎
同伴一名〕
田辺満寿子
〔渡辺　チカ
同伴二名〕

四国支部

藤江　清治
川崎　清水
〔野田　嗤彦
同伴一名〕
〔小原恒太郎
同伴一名〕
岡林　治
佐藤　勝喜
〔竹崎　浅吉
同伴一名〕
武内　雪恵

九州支部

具嶋　邦彦
浜田　政子
真鼻　貞吉
松本　得一
松本　通
森本兎之助
永岡　恵
〔吉田　宣蔵
同伴一名〕
木城　真澄

本部

足立宇三郎
〔安東　浄
同伴一名〕
〔安藤　珍成
同伴一名〕
近松　嘉吉
土居　樟巳
藤川　卓二
藤内　金次
藤原　広義
藤原　勢次
藤田　健作
深川　清
福本　三郎
福沢　有一
福渡　一雄
源島　重雄
半田　みつ
平高弥之輔
〔平高　恵子
同伴一名〕
堀内　宏展
菜崎　実
飯高　富二

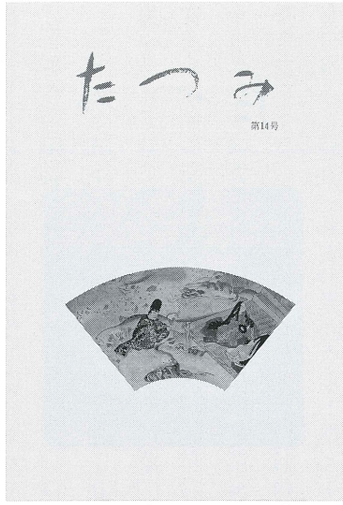
池　武猪
池田　政雄
今村　頼吉
今村冬二郎
石本喜久次
川村　一良
岩永　英三
加藤　福男
甲斐多聞太
梶本　百合
楓　喜和恵
金本朝二郎
叶野　健治
柏原　留路
川口　一郎
〔河野　九郎
同伴一名〕
〔木畑竜治郎
同伴一名〕
木村　七郎
木村　謙三
木村庄三郎
菊池　秋夫
北　保
小林　幾
小島　輝次
小谷　憲孝
古出　よね
小泉ひとし
久木元吉二
篠田　音吉
蔵原　惟門
町永　ムラ
松田　大介

松岡　俊一
松下　重男
三崎　鶴清
宮口俊二郎
宮永　勉
宮脇　弘吉
森　猛
森田金次郎
森田　歳一
武藤　作次
村上　孝造
中村　元義
〔中村　勇吉
同伴一名〕
中西　忠治
仲田　見
直木由太郎
西川　作蔵
西沢　寅一
野原　貫司
野島　一郎
〔小川実三郎
同伴一名〕
小倉　五郎
小野　三郎
越智　通允
大幡　久一
〔大沢　紳吾
同伴一名〕
大山　恭三
大柳勇三郎
岡田猪太郎
奥平　六朗
奥村　孝三

〔佐野　寿夫
同伴一名〕
佐々木武夫
佐藤　誠一
嵯峨崎　亨
三谷　義明
沢村　亮一
杉村　芳孝
柴田　忠
下村　幸男
下元　健吉
篠崎　宰輔
白井栄次郎
〔曽根　好雄
同伴一名〕
園川　静子
〔菅原　重之
同伴一名〕
隅田　まさ
砂田　義一
鈴木　治雄
鈴木　義則
田中　清
田中　実
田中　真一
〔田中　卓次
同伴一名〕
田中　昂
田宮　豊治
高橋　俊彦
〔高畑　誠一
高畑千代子〕

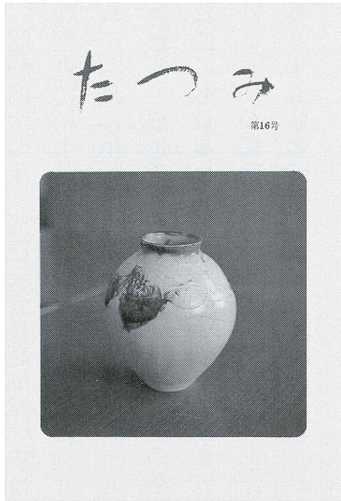
〔高梨　音次
同伴一名〕
高岡　芳馬
竹村　猪幸
武井　一郎
立野　清吾
〔富永　初造
同伴一名〕
月岡　貞子
〔宇津木亥一
同伴一名〕
宇佐美　篤
氏原　久助
内山　耐子
和田　祝恵
矢野　謙治
矢野松三郎
山口常太郎
〔山地　孝二
同伴一名〕
山本　浜一
山中喜之助
山崎　敏明
〔柳田　義一
同伴一名〕
柳田　直
安並　正道
家後修二郎

出席者
会員一九六名
同伴　三二名



（第14号）

（第15号）



（第16号）

昭和四十七年初頭、金子直吉遺芳集が発刊された。直吉翁の遺芳集発刊にあたっては、当時太陽鉱工㈱専務の橋本隆正氏が昭和三十年代半ば頃から編纂を抱いて資料を集め、発刊を見ずして逝かれた橋本氏の心中を、今村頼吉氏は会誌『たつみ』に「功成り名を遂げられたのでありますが『金子直吉翁遺墨集』の完成を一歩手前まで進められながら完遂されなかったことは誠に御遺憾の極みであったと拝察する次第であります」と記している。

刊行に際して、当時の朝日・毎日の両新聞に次の記事が掲載されている。

〈書　評〉　毎日新聞

金子直吉遺芳集

自由奔放な文章、書体

教えを受けた人たちの手で刊行

明治、大正、昭和を通じ経済界にあって政治をも動かした旧「鈴木商店」の〝大番頭〟（専務取締役）金子直吉（一八六六年―一九四四年）の手紙や遺稿を集めた「金子直吉遺芳集」がこのほど、その教えを受けた人たちの集まり辰巳会（神戸市生田区京町七二、太陽鉱工株式会社内）の手で刊行された。

金子直吉は、高知県吾川郡野川村で生まれ、二十一歳のとき神戸市の貿易商社、鈴木商店に入社。店主死亡後、同店の経営を任され、樟脳（しょうのう）や砂糖から人絹、鉄鋼にまで手をひろげて社業を拡張。大正六年、鉄輸出禁止措置をとった米国に対しては、当時のモリス大使と自ら交渉に当たり、米国から輸入する鉄材の三分の二相当のトン数の船舶を米国に提供するという船鉄交換契約を成立させた。

大正七年、米騒動に端を発した鈴木商店焼打ち事件で痛手を受けながら、帝人、日商、神戸製鋼、石川島播磨、東洋高圧、豊年製油などの基礎をつくり不世出の事業の鬼として終戦前年に世を去った。城山三郎著「鼠」のモデル。

B5判、四百三ページの遺芳集は、太陽鉱工監査役、柳田義一さん（七四）が五年がかりで資料を集め編集したもので五百部の限定出版。

十歳のころから奉公に出て文字を神官に習い、質店につとめていたころ元武士が質草にした書箱を読んで独学した人とあって、我流だが自由奔放な文章、書体が四百七十葉を越える写真版で納められている。この中には苦難の時期によんだ「雷鳴の後はすずしき青田かな」などの俳句六十句、短歌二十首も含まれており、経済人という堅さの裏に秘められた故人の情緒にあふれた一面もしのばせる。

柳田さんによると「号の〝片水〟（へんすい）は金子姓の頭文字Kが水という字の半分に似ているところからつけたもの。この人の人間的な味わい深さがこの遺芳集からくみとってもらえると思う」という。

本年元日を発行日としたが、早くも注文が殺到、増刷の予定。印刷は神戸市東灘区御影本町二の一九の八、中外印刷。

（四六・一二・九大毎神戸版）

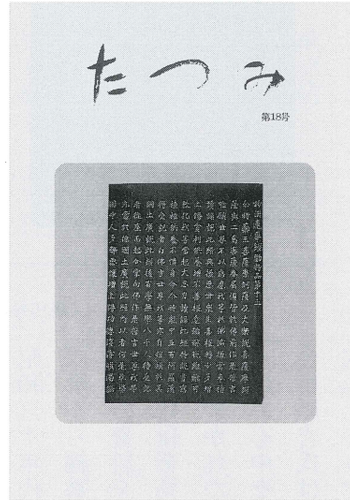
〈書　評〉　朝日新聞神戸版（四七・一・二三）

金子直吉遺芳集

近代日本の工業化に猛進した旧鈴木商店の総帥、故金子直吉翁を遺墨でたたえた記録、思い出のアルバム、短ざく、掛軸、色紙、日記、メモ帳、遺品、手紙などをていねいに集録してある。中折帽の中に水のうを入れて歩いた〝事業の鬼〟の写真、「この戦争という絶好のチャンスをつかんで、鈴木を育て……三井、三菱と天下を三分し…」などと、第一次世界大戦中に書いた手紙など、エコノミックアニマルの大先駆者の風ぼうがうかがえる。神戸市生田区京町七二、太陽鉱工株式会社内、辰巳会本部編集。五百部限定出版。

昭和四十七年、辰巳会会長高畑誠一氏は日本経済新聞『私の履歴書』に十月十五日から二十六回に亘り掲載される。翌四十八年六月に単行本『私の履歴書』第四十八集が発行され、読者評として高畑氏は、「戦前の商社マンの活躍ぶりが面白く、記録的にも貴重なものがありますが、本業外の日本ゴルフ界草分けとしての秘話が評判になりました」と記されている、高畑会長八十五歳の時である。

（第19号）



（第18号）

昭和四十九年一月二十一日の新年例会は金子直吉翁三十年祭として生田神社会館で執り行われる。『たつみ』二十一号の記述には「―この会場で今日しも金子直吉翁の三十年祭を執行するのである。金子さんは春まだ浅い二月十九日に御逝去になったのであるが辰巳会はこれを取り越して今日の主題として、新初会合の例会に大きな意義を持つ事になった。朝方から少し白いものが散らつき出した様だが、寒さものかわ元気一ぱいの諸氏が続々と到着された温かさが其処彼処で湧き上る―」。

会誌『たつみ』は昭和三十九年五月の創刊号から昭和四十九年一月で第二十号になり、年二回の発行である。辰巳会は創立から十五周年を迎える。

（第20号）

同年八月に会員名簿が作成されたが、正会員の人数が昭和四十二年名簿の六百六十四名をピークとして、昭和四十六年六百十八名、今回は五百五十七名に年とともに減少している。

神鋼社長井上義海氏は「―神戸製鋼所は、明治三十八年九月一日、神戸脇浜においてささやかな鋳鍛工場として弧弧の声をあげたのではありますが、爾来七十年、幾多の風雲に耐えて

幸いにして今日、我国代表的な重工業メーカーとしての地歩を築くに至ったのであります。今日の当社の姿を思うにつけ、七十年の歴史の礎となられた多くの先輩諸兄、そして当社に対し有形無形のご支援を賜りました関係各位に対し衷心から感謝の意を表するものであります―」。この様に述べている。

昭和四十九年一月の新年例会は、金子直吉翁の三十年霊祭として神戸生田神社会館で執り行われる。この例会に十年振りに出席している帝人社長大屋晋三氏について、たつみ二十一号の記述には「―略―さて、何と云っても本日の圧巻は、帝人社長大屋さんの出廬であろう。如何に日頃お忙しいかが判る昨年十一月イランの最高勲章を受けられ年末ぎりぎりに帰朝されて直後、金子翁の年祭を聞いて馳せ参じて下さったのである。御受章を御祝いしてささやかな花束を御贈呈申上げたが満場の拍手を浴びて予期せられないハプニングに流石の大屋さんも些が面映ゆげなたじろぎを見せられた。尤もこのイラン人最高勲章については週刊誌が政子夫人の内助の大活躍をユーモアまじりに書き立てて石油合弁事業の貢献度は半分以上夫人の功績

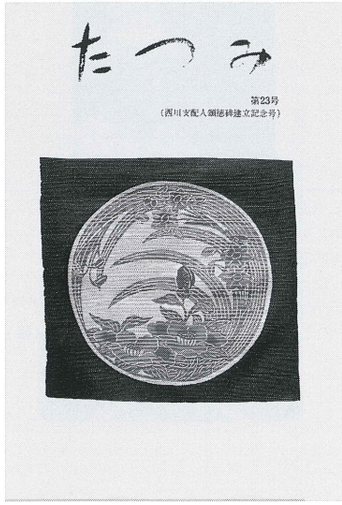
（第21号）

（第22号）

助の功を笑いにまぎらせ否定されなかった。しかし、大屋社長の功績は、その後イラン革命政府の樹立で昔日に帰したことが惜しまれる。

（四）辰巳会創立十五周年

昭和五十年五月十五日、全国大会は神戸祥龍寺で開催する。辰巳会創立十五周年にあたる。周年の記念事業が一年前に発案



（第23号）

にあり実質的には婦人が受章されてもおかしくない等と書き立てたエピソードがある。―以下省略―」。大屋社長は婦人の内